

アジア版エラスムス次世代研究者招聘・報告書

(フリガナ) 氏 名	とう れい 湯 麗	所属先都市・国名 北京・中国
所属（大学、研究科、学年/職名）	北京外国語大学日本学研究センター 博士三年生 Beijing Center for Japanese Studies Beijing Foreign Studies University Ph.D. Candidate	
招聘期間	2010 年 4 月 26 日 ~ 2011 年 3 月 26 日	
京都大学における カウンターパート (受入教員名、 研究科・ 研究所名)	伊藤公雄 教授 文学研究科 社会学	
研究テーマ	日本女性地位の歴史的研究——近世を中心に Historical research on Japanese Women's Status——focus on the early modern period #	
<p>講義を受講した場合、主要受講科目名（5つまで）および担当教員名</p> <p>落合恵美子 社会調査入門 文学部</p> <p>小山静子 人間形成史論 総合人間学部</p> <p>GCOE リレー講義 親密圏と公共圏の再編成 文学部</p> <p>上野千鶴子 市民権・ナショナリズム・ジェンダー 東京大学</p> <p>森本一彦 質的調査法の可能性 文学部</p> <p>大和礼子 女性の雇用労働についての様々議論と実証分析 関西大学</p> <p>等</p>		

- 所属、研究テーマなどの表記は日本語と英語の両方でお願いいたします。
- エラスムス招聘の研究上の成果について 2000 字程度で報告してください。(別紙使用。参考資料がある場合、添付してください。)
- 招聘留学・調査/研究中の様子がわかる写真のファイルがあれば（肖像権に触れない 3000KB 以下）添付してご提出ください。本プログラム・ホームページのエラスムス事業のページに掲載いたします。

* 帰国後一ヶ月以内に GCOE 事務局宛 intimacy@socio.kyoto-u.ac.jp にメールでお送りください。

日本近世に生きた女性の姿は、封建社会において虐げられてきた社会的弱者として描か

アジア版エラスムス次世代研究者招聘・報告書

れてきた。しかし、社会史、女性史、家族史、歴史人口学の登場によって、か弱い女性像は塗り替えられてきた。近世における日本女性のおかれた実態はいったいどうなっていたか、どのように位置づければいいのかを明らかにしたい。

この問題を検討することに当たって、本研究は主に文献研究方法を利用した。まず、日本近世における女性地位や生き方に関する資料や先行研究を調べてみた。政治、法制、経済、婚姻、家庭、文化などの先行研究によって紹介されたトピックから近世に生きる女性の実像を検証することとした。定兼学、菅野則子、長野ひろ子、高木侃、藪田貫、柴桂子など数多くの研究により、事例の豊富さとならんで、近世女性の主体性・自立性が共通した特徴として見られる。近世に生きる女性たちの生活ぶりは教訓書の言うとおりに必ずしも寂しいわけではなく、特に下層階級の女性たちの日常生活では性別はあまりなかった。百姓や町人の女性たちは家業を手伝って、夫と同じぐらいの発言力をもった。性別による力や地位の差は社会的な役割において公然と決められており、女性は従属的なものとみなされがちであったが、上野千鶴子氏が指摘するように、女性たちは裏側で——家庭において——大いに勢力を振っていた。近世の女性は歴史上、「固有名詞」としての存在でもあると言えるだろう。

次に京都大学の豊富な蔵書を利用し、なるべく多くの一次資料を収集したり、史料を解説したり、さらにフィールド調査を通じて、近世日本女性の実像への検討を行った。以下のように簡単にまとめる。

第一、『全国民事慣例類集』の分析

婚姻は女性の日常生活の実態を把握するのにとても重要な手がかりの一つである。近世後期女性、婚姻におけるありかたを『全国民事慣例類集』史料によって明らかにすることを試みた。『全国民事慣例類集』は明治政府の司法省が「民法典編纂の材料に供することを目的に調査・採録した全国各地の民事慣例を整理・分類して印行したもの」である。具体的に『類集』の第一篇（人事）の第三章「婚姻ノ事」（「届手続送籍」、「諸式礼」、「嫁資」、「媒介人」、「離縁及離縁状」、「財産分割子女教育」の六款に分けられ、466事例の慣例が記録されている）を分析し、近世後期の女性の婚姻状況について論じた。たくさん事例をデータ化して、その顕著な特徴を検討することを通じて、日本近世女性の婚姻地位及びその地域的な相違を考察してみた。嫁資、媒介人、離縁と離縁状などの地域別状況を数量的に比較した結果、日本全国において多様な地域差が浮き彫りにされたと考えると同時に、『類集』に記されているように、近世後期の女性たちは結婚のときは持参金を持ってきて、一定の経済的な自立性を保ち、婚姻中、紛議があったら、媒介人を通じて自己意思を伝え、特に離婚のときは、嫁資が返還され、双方協議した上離婚し、自ら離婚を提出でき、また速やかに再婚できる場合も少なくなかったことなどがわかってきた。この研究に基づいて、さらに中国清の時代における女性の婚姻地位と比べながら、2010年12月の京都大学で行われた第3回GCOE次世代ワークショップで発表をした。

第二、『上田美寿日記』の分析

アジア版エラスムス次世代研究者招聘・報告書

上田美寿日記を対象に、阿波藩の上田美寿氏を例として、上田美寿が晩年のころ書いた「桜戸日記」を中心に、棚橋氏の先行研究を踏まえたうえで、この時代に生きた女性たちの精神と交信して、近世の女性のリテラシーや教養を考察することとした。『上田美寿日記』を読むことによって、彼女は文字のある環境に生涯を送って、割と高いリテラシーを持っていることがわかった。地域社会の中で子供たちの師匠として子供に教えるほかに、読書が日常生活での主な活動であった。書物の中に、漢書の論語、孝経、唐詩選など、仏書では観音経、寿命経など、文学書では紫式部日記、湖月抄、徒然草、竹取物語、五元集などの古典作品や俳句集、教育書には女大学、女手引草などがはっきりと明記されて、教養がとても深かったといえる。リテラシーだけではなく、上田美寿はほかの女性と俳諧・発句の交流を通じてネットワークを作った。実家三宅との交際もかなり頻繁で、嫁が結婚後も生家とのつながりを強く維持しているもう一つの例である。したがって彼女は地域にしても、俳諧ネットワークにしても、広い範囲で活躍したと言える。彼女の日記から交友関係とその範囲、家族・親族や地域社会の中での彼女の位置づけなど多くのことが明らかにできる。今後さらに追究したいと考えている。

しかし、日本近世における女性地位については、一体何を基準に、どのように全体的、客観的に評価すべきか。もっと視点をひろげ、中日の比較研究、つまり中国清の時代における女性たちの生き方はどうなっているか、その共通点や相違点があるか。これらの問題は依然として残されている。今後の課題として引き続き研究しなければならない。